

朝鮮

孤児となつて引揚げ、養女へ

栃木県 馬場 幸 榮

昭和十四（一九三九）年、私は福岡県小倉市の足立尋常高等小学校に入学しましたが、父の勤務先が朝鮮咸鏡北道慶興郡阿吾地にあつた朝鮮人造石油株式会社に変わったので、一学期の終わりに家族と共に渡鮮しました。二学期から咸鏡北道公立灰岩尋常小学校に転入しました。当時の校長先生は、確か八波勝夫先生だったと記憶しています。家は露頭梧鳳洞で小池炭鉱のあつた所です。当時は日本人の生徒は少なく、炭鉱の組長の息子

さんの進ちゃんと手をつないで、凍て付いた道を通学していました。

三年生になるころには、灰岩洞西三丁目の社宅に移りました。お隣に、栃木県今市市出身で新婚の赤羽さん夫妻が住んでいました。お二人は、私の両親を実の親のように慕ってくれて、私を「幸坊、幸坊」と呼んでかわいがってくれました。後にこの赤羽のおばさんが、それからの私の人生にとつて忘れることのできない転機を与えてくれることになりました。

当時の北朝鮮での日本人の暮らし振りは、大層恵まれていました。社宅にはスチーム暖房が通つていて、外は零下三十度になつていても、家の中

は春のように暖かでした。トイレも水洗式でした。一人っ子だった私は両親に甘え放題で、幸せな日々を送っていました。

四年生のときの受け持ちの、西田幸枝先生が近くに住んでおられましたので、よくお宅に遊びに行きました。西田先生には、長刀の寒稽古や運針検定などの厳しい指導を受けましたが、厳しさだけでなく、優しい言葉でいつも私を励まして下さいました。

そのほかにも中尾一徳教頭先生、土屋五郎先生、そして松井孝子先生には大変にご指導を頂きましたが、お三方の先生が今もご健在でいらつしやるのは嬉しい限りです。特に五年生、六年生と二年続けて受け持つて頂いた土屋先生には、進学に向けての課外授業でいろいろとお世話になり、進歩賞を頂くこともできましたし、小国民新聞社から綴り方で賞も頂くことができました。

休み時間には、暖かな教室で乾布摩擦を行い、校庭ではスケート練習もしました。運動会、遠

足、学芸会など楽しかった小学校時代の思い出はつきませんが、戦時下における小国民としての厳格な教育と、愛情あふれるご指導を授かったことは、今までの私の人生において常に基本となっております。

昭和二十年四月には、希望が叶って羅津高等学校に入学しました。灰岩国民学校からは、私一人だけの入学でした。そのころ我が家は、西三丁目の社宅から阿吾地に移っていました。

私は生まれて初めて親元を離れて羅津に行き、佐賀県出身の渡辺さんのお宅で下宿生活を送ることとなりました。渡辺さんのお宅では、私より一歳年上の灰岩尋常小学校十九年卒業の石元操さん、もう一人の先輩と一緒にしました。

入学式には両親も出席し、渡辺さんにも挨拶をしました。その後、赤羽のおばさんが塩餡の入った大きなぼた餅を作って持って来てくれました。そのころには、赤羽のおじさんは出征して留守でした。

女学校でも、大方の男の先生は応召中でしたので勉強時間も少なくなり、裏山の開墾をしたり、羅津港の埠頭へ大豆を拾いに行ったりの作業が増えてきました。夢も希望もだんだんと薄れてきて、不安とホームシックに耐えながらの毎日でしたが、羅津高女生としてのロマンと誇りは失うことはありませんでした。

羅津公立高等女学校は昭和十四年創立の日朝一の女学校で、初代校長武田郡太郎先生の決断で日本一の校歌、そして永久不滅の校歌を作るということで、当代一流の作詞家、西条八十先生、一流の作曲家、山田耕筰先生にお願いをしてできた、立派な校歌を持っていました。私は今でも歌うことができます。

一 結ぶ日満両国の

おもき使命に輝く港

羅津の街の潮風に

黒髪なびかすわれらは乙女

(くり返し)

二 御稜威あまねき半島に

磨く知徳のたのしき団欒

三つの校訓畏みて

いそしむわれらの理想は遠し

(くり返し)

三 友は集まり散ゆけど

仰ぐ婦徳の鑑はひとつ

こころを鍛え身を練りて

諸共築かん御国の栄

(くり返し)

いつごろからか、羅津にも夜半の空襲が激しくなりました。大人たちは、飛行機はアメリカ本土から飛んで来るのではなくて、もつと近い場所に基地があつてそこから飛んで来るのではないか、などと話していました。空襲がある度に私たちは防空壕に入り、解除になると真つ先にひばりが丘に登り、校舎の無事を確認しては「これでは阿吾地の親元には帰れない」と、がっかりしたものでした。

昭和二十年八月九日にソ連が参戦しました。

「北に避難せよ！」という命令を受けて、リュックサクには両親に便りを出すつもりで、便箋や封筒を忘れずに教科書などと一緒に入れて背負い、下宿の渡辺さんや、同じ寮にいる先輩などと共に羅津を後にしました。渡辺さんのご主人は、私がお世話になって間もなくのころに、六人の家族を残して応召されていきました。

避難道の道中でも、私たちは何度も機銃掃射に遭いましたが、そのたびに河原を転がるようにして「お母さん！ お母さん！」と泣き叫びながら、必死で逃げ回りました。このときに、機銃弾で撃たれて亡くなった方もたくさんいました。

渡辺さんの家のおじいさんは、腰痛がひどくて日頃から難儀をしていましたが、川を越えるときは周囲の人たちに背負われて移動していましたし、渡辺さんのおばあさんは赤ちゃんを背負い、八歳の子を頭にした三人の幼子は、女学生の私たちの間をつないでいた着物の紐にしっかりと掴まり、

みんなからは遅れながらも泣き泣き歩き続けていました。

やつとのことで会寧にたどり着くと、灰岩や阿吾地から避難してきた、「日室」のマークをつけた人々に会うことができました。私は、必死になって両親の消息を尋ねながら歩きました。

そのうちに、羅津から北に向かっていた私と阿吾地から会寧に向って歩いて来た両親と奇跡的に出会うことができました。私たちは、言葉もなくお互いにひしと抱き合い、涙を流しました。抱かれたときの母の温もりが、そして力強い母の喜びの力が、今でも私の胸に背中に、そのときのまま残っています。もしこのときに会っていなければ、永久に親子が出会うことはなかったと思っています。

今までお世話になった渡辺さん一家、それまで行動を共にしてくれた人々とは、ここでお別れしました。羅津高女二年生の先輩二人も、親元を遠く離れて渡辺さんの家で生活をしていた三人団結

の仲良しでした。避難行動中も、お互いに家族に
出会えばいいねと励まし合いながら、命からがら
一緒に会寧までたどり着いたのです。

いよいよお別れするとき、私が両親と手をつない
で「さようなら！」と言葉をかけたら、二人は大
声で泣き叫びました。「どうして里村さんだ
け行くの！ 私たちをおいて……。私のお父さん、
お母さん、どこにいるの。早く見つけて、早く会
いたい。どこに、どこに。お母さん！ お母さん！
里村さんも行かないで！ 一緒に歩こう！」十三
歳の少女たちです。ただ泣くばかりです。泣きじ
やくる中、悲しいままお別れをしました。

先輩の一人、石本操さんには、平成九（一九九
七）年に京都で開催した「阿吾地会」で再会する
ことができました。そのときに石本さんが、「里村
さんがご両親に出会えたとき、うらやましくて、
うらやましくて、そのときは今も忘れてお
りません！」と言われましたが、胸にじいんととき
たことでした。下宿の渡辺さん一家とは、それっ

きりになってしまいました。

私たち親子三人は皆さんと別れた後、満州方面
に歩きました。その途中で会寧の陸軍守備隊に立
ち寄ったところ、渡辺さんのご主人の渡辺中尉に
偶然お会いしました。私は、別れたばかりの渡辺
さん一家の様子を話しましたが、聞いていた渡辺
中尉の目には涙があふれていました。「今夜、会寧
橋が爆破されるとの情報もあるので、満州方面に
逃げるのは危険だから、すぐに今来た道を戻り南
下するように」と渡辺中尉は言って、角砂糖や乾パ
ンを分けて下さいました。四カ月の下宿生活で短
い日々でしたのに親切にして頂き、まさに奇跡の
再会、神の配剤でした。鮮満国境でのつかの間の
出来事でしたが、軍服姿が凛々しく、不動の敬礼
で私たちを見送って下さった渡辺中尉のお姿を思
い出すたびに、涙があふれて思わず手を合わせて
しまいます。

その後、私たち親子三人は母の弟の阪本一家四
人と合流し、七人で野宿をしながら、あるときは

貨物列車に押し込まれながら、茂山―古茂山―清津―咸興へと逃避行を続けました。途中では様々な悲劇に遭い、発狂した人も見かけました。

ある日、どこだったか場所は覚えていませんが、学校の校庭のような所に鉄かぶとや小銃などの武器が整然と並べられているのを見ました。大人たちは、これは日本軍が武装解除されたのだろうと、初めて敗戦を知り、声を上げて泣きました。

悲惨な避難民となった私たちは、昭和二十年の十月半ばに、ようやく興南に着き鍊風寮に収容されました。

ここで、灰岩小学校の大滝先生や西田先生にお会いすることができました。しかし、しばらくして大滝先生は、だれにも看取られることなく、ひっそりと寂しくお亡くなりになりました。

寮では、わずかばかりの大豆や豆かすの配給しかありませんでした。飲み水は、近くの小川の氷を割って飲んだりしていました。寒さと栄養失調で、発疹チフスが蔓延して毎日多くの人が亡くな

っていきました。死んでいくのが当たり前のような状況でした。そんな折に、赤羽のおばさんと偶然に出会いました。敗戦前に、羅津の渡辺さんの家にぼた餅を持って来て下さったとき以来の再会でした。私たちは泣いて抱き合い、再会を喜び合いました。

奇跡の親子再会から四カ月が経った、昭和二十一年十二月十六日の大雪の夜に、母が亡くなりました。冷たいコンクリートの部屋で、父は母の髪をなでつけ、リュックサックの中に残っていた真新しい白足袋を、冷たく硬くなった母の足に履かせました。このときの母の顔がとても美しかったです。とを、今でも鮮明に覚えています。

母の亡骸は藎に包まれて、当時、共同墓地になっていた三角山に葬られました。母の遺体を運んでくれた大人の人たちも栄養失調で体力はなく、凍った道端に何度も放り投げられるように置かれ、休み休み三角山に担がれて行きました。三角山に着いたときには、父は私に山の下で待っているよ

うに言いました。後で父から聞いた話では、母の遺体は土が凍っているので、たくさん葬られているほかの遺体の上に投げ落としただけで、遺体の上に土を被せることができなかったとのことでした。遺体を置いて下山しながら振り返ると、日本人の遺体から身の回りの品を盗もうとして隠れていた朝鮮人が、母に履かせた真新しい白足袋を手にして笑っていたとのことでした。その光景を目にしたときの父の気持ちは、いかばかりに悔しかったことだろうと思うと共に、娘に母親の無情な葬られ方を見せまいとして、私を下に残した父の心情を察するときに胸が熱くなつてきます。怨念の山。三角山墓地に葬られた日本人の死者は、約三千人と言われています。

母が亡くなった夜。鮮満国境地区から避難行を共にしてきた、阪本の叔母も亡くなりました。

さらに、弱った体で暗い廊下を伝い歩きをして母の寝ている所まで来ては、「姉ちゃん！ 姉ちゃん！」と涙を流していた叔父も、母や叔母の後

を追うようにして亡くなりました。

残された九歳と七歳の二人の子供たちは、寮の孤児室に移されましたが、酷寒の中で息を引き取りました。雪を口にしながらの餓死でした。大好きな私のいとこたち、一人っ子の私とは姉弟同様にして今まで過ごしてきたので、かわいい二人の死はとてもショックでした。二人共栄養失調なので、眼だけがぎよろぎよると大きく、体は骨と皮ばかりになっていました。

大人たちは自分の身を守ることで必死でしたので、孤児は見捨てられるようになっていました。今思えば哀れなことで、胸が痛くなり涙があふれます。「仁史君よ！ 田鶴子ちゃんよ！ 助けられなくて、ご免ね」

母が亡くなり、父と二人だけの寂しい生活になって間もなく、今度は父が床に就くようになり、鍊風寮の三階で暮らしていた赤羽のお婆さんが、看病に来てくれるようになりました。

ある日、お婆さんが「幸坊、とつても親切な人

がいるから訪ねてみようよ」と、私を連れ出ししました。どのくらいの間歩いたでしょうか、よく覚えていませんが、着いた所は、興南雲竜小学校の校長官舎でした。しかし、校長一家は官舎を引き払った後でした。がっかりしながら戻る途中で、天機里の市場で「明太(助宗鱈)」を一匹買いました。おばさんは寮に帰ると、魚好きの父のためにすぐに煮付けてくれて、寝ている父の口許に運んでくれました。しかし、そのころにはもう父は口を開ける元気も残っていませんでした。私も一生懸命に父の口に押し込もうとしましたが、ついに口を開けてはもらえませんでした。父の出身地は長崎県の大村湾の近くで、海の幸の産地で大好物でしたが、それを食べる気力もなくなっていました。

望郷の念も熱く、日本に帰ることを切に願っていた父ですが、願いも叶わず昭和二十一年の一月五日に亡くなりました。母が亡くなって二十日後のことでした。

私は、とうとう一人ぼっちになってしまいました。寮にいた小池組の組長さんが私を引き取って下さいましたが、間もなく組長さんが日本に引き揚げることになったので、同じ寮にいた親戚の松井という叔父夫婦の世話になることになりました。そのうちに、この叔父夫婦にも引揚げの話が起きましたが、私を連れて引き揚げることはできませんでした。

ある日のこと、寮の廊下で「栃木県人はいませんか！ 栃木県の出身者はいませんか！」と連呼する、一人の男性が現れました。栄養失調で体が衰弱し横たわっていた赤羽のおばさんが、その声を聞きつけて、「私も栃木県の出身です！」と言って廊下に這い出て、その男性と何か話をしていましたが、戻って来るなり、赤羽のおばさんは「幸坊、前にとっても親切な人がいるから訪ねてみようよと言って幸坊を連れ出して会いに行った、雲竜小学校の馬場庸太郎校長さんだったよ」と言いました。馬場さんは、「自分たちは、お金を持って引

き揚げるには制限があるから、余ったお金で同県人を一人でも多く日本に帰してあげたい。闇船の用意はできているので、あなたたちも引き揚げなさい」と赤羽のおばさんに言いました。

おばさんは、「お話は大変に有り難いことです。私はお世話になった里村さんのお嬢ちゃんを一人置いて帰るわけにはいきません。それでは、亡くなったご両親に申し訳がございませんで！」と、私のためにお断りをしていました。しかし、馬場さんは「今、私も孤児二人を預かっています。二人でも三人でも同じことです。私が面倒を見ますので、赤羽さんは先に引き揚げなさい。このお嬢ちゃんも、私が引き揚げるときには必ず一緒に連れて帰り帰郷先に送り届けますから、安心してお帰りなさい」と言って赤羽のおばさんに約束してくれましたので、赤羽のおばさんも決心をして、私を馬場先生夫妻に託して引き揚げることとなりました。

それからの私は、居留民会の世話役でもあった

馬場先生夫妻に引き取られ、生き地獄さながらのつらい悲しい思いが詰まった錬風寮を後にしました。四年生のときの担当だった西田先生が、「かわいがってもらいなさいね！」と言って途中まで送って下さいました。

西田先生とお会いするのがそのときが最後になるうとは、思いもしなかったことでした。その後、福井県に引き揚げられた西田先生は、結婚されて林姓となれました。帰国後も私にたびたび励ましのお便りを下さいましたが、昭和四十八年に病気でお亡くなりになりました。先生がご病気だということを知った私は、お見舞いに初めてお伺いした日は、奇しくも三十五日忌で納骨の当日でした。先生は、病床から見える所に笑顔の私の写真を置いて下さっていたそうです。遠くからでも、いつも私の幸せを願って下さった、凛とした先生のお姿を忘れることはありません。

馬場先生夫妻に引き取られてからの私は、それまでのつらく悲しかった日々が少しずつ癒されて

きました。食糧事情もよくなりました。しかしそれよりも何よりも、馬場先生夫妻が懐の深い大きな愛情で私を守って下さったからです。

その間でも、毎日のように三角山へ遺体が運ばれる光景を見ました。雨の降る夜には三角山でリッが燃え、青い炎が立ち上がり光っているのも再三見ました。そして、風に吹かれて発する何とも形容できない音が、あたかも遺族の人々の泣き声が闇に木霊こだましているようで、恐ろしくそして不気味なことでした。そんなときは、部屋の間で震えて過すごしました。

昭和二十一年五月ごろだったと思いますが、人々は口々に「さらば！ 朝鮮よ」と大声で別れを告げながら、私たちは興南を後にして出立し、海岸から閤船に乗り三十八度線越しに挑戦しましたが、途中で朝鮮保安隊に見付けられて、近くの海辺におろされてしまいました。致し方なく陸路を必死で歩き、やつとのもので三十八度線の山を越して注文津にたどり着きました。

注文津では、難民收容キャンプに收容されてテント村生活に入りました。收容キャンプはアメリカ軍の管理で食べ物も良く、何といっても清潔で、興南での生活とは雲泥の差でした。ここで日本への引揚船の到着を待つ生活が始まりました。

ここでもいろいろなことがありましたが、私はここで朝鮮人のオモニに連れ去られそうになったことがありました。それは食べ物に關してのことでしたが、オモニの甘い言葉についつい乗っかってしまい、連れ出されそうになったのでした。もしついで行ったら、そのまま残留孤児になってしまったと思います。同じような情景を何回も見ました。

昭和二十一年七月五日、その日は馬場庸太郎氏の五十歳の誕生日でしたので、印象が強くよく覚えていきます。

引揚船の甲板上から、はるかに陸地が見えたとき、大人も子供も男も女も、みんな一斉に「日本の山だ！ 日本が見えた！ 帰って来たぞ！」と

連呼し、甲板上で小躍りして喜び合いました。そのうちに叫び声がだんだんと小さくなり、代わりには人々の目に涙が浮かんで来て、いつの間にか嗚咽に変わっていました。

引揚船は山口県の仙崎港に着岸し、そこで下船し日本の地を踏みました。内地の土を踏んで間もなく、引揚者は一列に並ばされて、コンプレッサーでDDTを頭から背中へ、そして下半身へと全身にかけられました。だれもが真っ白い粉だらけの姿になっていました。私は気分が悪くなり、その場に倒れてしまいました。

しばらくして、心も体も落ち着いたところに、私たち引揚者の世話をしている援護局の係員に「里村さん、あなたの本籍地である長崎に帰るならば、丁度長崎に行く人がいるので一緒に帰れるように手続しますけれども、どうされますか？ それとも馬場さんと栃木県に行かれますか？」と尋ねられました。馬場夫妻からは、「自分の好きなようにしなさい」と言われました。私は、しばらく考え

ました。長崎は里村の本籍地といっても見知らぬ親戚しかいませんので、今日まで私の面倒をみて下さった馬場夫妻とずっと一緒にいたいという気持ちが強くなり、栃木に行く決心をしました。「十三歳の決断」でした。この決断こそが、私の一生の運命を左右し、それからの生き方を大きく展開させました。いとしの十三歳、その選択・決断は間違っていないでした。そしてその選択が、後に馬場夫妻が私の養父母になるという結果をもたらしたのです。

その夜、私は馬場夫妻と共に列車で帰郷先の栃木に向かい、七日に真岡駅に着きました。駅頭には、馬場家の長男の庸三伯父さんが出迎えていました。庸三伯父さん夫婦も外地にいたのですが、真岡における馬場家の財産を守るために、半年前に帰国していたのです。伯父は初対面の私に向かって、「どこからついて来たの？」と聞きましたので、私は「北朝鮮の興南から」と答えましたが、伯父夫婦も命からがら苦心・惨憺たる引揚体験者

ですから、その大変だったことはよく承知している様子でしたが、見ず知らずの女の子を連れて帰ってきた馬場夫妻には驚いているようでした。そして、さらに私に「恐ろしい目に遭ったことだろう。ここまで来ればもう大丈夫だよ、安心しなさい」という暖かい言葉をかけて下さいました。私も、心の底から安心感が湧いてきました。嬉しくなった私は、自転車に乗った伯父の後から歩き、馬場家に向かいました。その途中で、家々の軒下に飾り立てられている七夕飾りが目に入りました。それを見たときに、改めて無事に日本に帰ってきたことを実感しました。

引揚者である私たちの生活は、引揚者のだれしもが経験したように、貧しく苦しいものでした。馬場家の財産は、「不在地主」として大部分が没収されていて、持ち帰ったリュックサック一つが唯一の財産となり、文字どおり無一文の裸同然での再出発となりました。

養父母と私は、間借り生活をしながら私製のタ

バコ巻きをしたり、塩辛やカルメ焼きを売り歩いて日銭を得るようなこともしました。

やがて養父の馬場庸太郎は、朝鮮で四十八学級もあつた学校の大校長だったプライドをかたぐり捨てて、真岡の新制中学の一教員に採用されて、やつと正業に就くことができました。私は、羅津高等女学校の在学証明書が無いということで、新制中学校に転入になりました。初めて養母と新制中学校に行ったとき、級友たちが「あのとき、家の前を通つた人だ！」と、私を見ながらささやいているのが分かりました。

引き揚げて来て、最初に真岡駅に着いたときの私の格好があまりにも異様で、土地の人々の注目を集めたようでした。それもそのはずで、私が興南で暮らしていたときは、ソ連兵などからの危害から身を守るために、頭は髪を切つて坊主頭にし、服は男の子の服装をしていて、顔には煤^{すす}を塗りつけて黒くしていたのです。そのときのままの姿で引揚船に乗り、リュックサックを背負つて、ゴザ

を巻きつけた傘を持って真岡の駅に降り、駅から大通りを通って馬場の家に向かったので、その姿・格好は物珍しさもあって、多くの人々の目に見られていたのですから、致し方ないことでした。しかし、中学に入ってから級の友たちは私をからかうこともなく、今よく言われるいじめに遭うこともありませんでした。むしろ物質的な援助さえしてくれました。

歳月が経ち、養父母は苦しい家計を遣り繰りし、私を東京の山野高等美容学校へ進学させてくれました。その後も、美容研究のためには費用を惜しみなく出して頂きました。養母自信も四十一歳のときに美容師の免許を取得して、真岡の市内で美容院を開業していたのです。私は、昭和二十八年に東京での勉強を終えて真岡に帰り、養母の店を継いで現在に至っているのです。

私に馬場夫妻を引き合わせ、私の一生の運命に大きな転換をもたらせて下さった、赤羽のおばさんは今も健在です。八十歳台も半ばを過ぎていま

すが、八十歳に近くなっている私のことを、今でも「幸坊！ 幸坊！」と呼んで子供扱いをします。

私の人生の恩人である、養父、馬場庸太郎は八十八歳で、養母馬場ミチは九十四歳で亡くなりました。共に天寿を全うするまで私と一緒にでした。幸せな晩年を送ってもらえたことだろうと信じております。

里村の実父母、そして里村の叔父、叔母、さらにいとこの霊まで、馬場家のお墓で供養するように養父から勧められて、今は一緒に供養しています。里村家六人の戒名も頂きました。

引き揚げる際に、大切に持ち帰った「爪」「遺髪」も一緒に埋葬しました。おしやれで、美しかった里村の母の自慢の黒髪には、虱の卵がついておりました。長い抑留生活の中で、こと志に反して避難民として非業な最後を遂げた、幾多の同胞たちの悲惨な状態を表す一現象でもありました。

私は、現在「日本弱酸性美容協会」の会員です。頭皮の排泄作用により「健康で美しく、若返る」

をテーマにして、「ベル ジェバンス クリニックサロン」を経営しております。私が、自分の仕事で最も誇りとしている「弱酸性美容」を、私のこの手で里村の母の髪にしてあげることができたならばどんなに幸せな事か、と思うとき……。戦争のない平和を心から願うものです。

三角山に眠る里村の両親は、今でも私を見守ってくれていることだろうと思う毎日です。私の人生を、豊かに幸せへと導いてくれた馬場の養父母から徳をたくさん与えられた私は、最高の幸せ者です。感謝の気持ちで毎日過ごす昨今です。

里村から、馬場の姓に変わるまでの少女時代、朝鮮で敗戦を迎え、悲しく恐ろしく怖く、そして悲惨な地獄をいろいろと見てきました。その体験を、戦争の実態を知らない人たちに伝えておきたい、との一念からペンを執りました。

ひとつの記録

群馬県 武藤 あい子

私のルーツは、群馬県群馬郡群馬町北原にあります。その群馬町から一族が東京へと移り、京城（ソウル）を終焉の地と決めた経緯は、子供だった私にはよく分かりませんが、記録に残っていることをまとめてみると……。

父の長兄は、満州大連で事業を起こし、成功して京城に膨大な土地を求め、私の父と祖父とを内地から呼び寄せたとのことでした。

京城郊外の西江という所に私が行ったのは二歳のとき、昭和七（一九三二）年のことでした。

伯父は、養鶏、果樹園と他に見渡す限りの田園を持ち、大勢の朝鮮人を使っており、父はその人たちの先頭に立って指導・監督をしていたようです。

伯父は晴耕雨読、祖父は孫である私をかわいが